

TVを見てみると、虚構の社会をさもありそうに語れるのは、学生時代にヘルメットをかぶっていたが「エイヤツ」と仮面ライダーのように変身した御用学者で、トラクターの油圧オイルを交換できない高学歴生産者と同席するのを見かけることがある。そこで語っているのは農家の話で、あなたの後を継ぐ人は誰なのかという農業の話ではない。

当の私も1年に1度くらい、左巻が多い今世の最高学府ではあるが、まったく相反する先生たちからのお誘いで農業関連の勉強会にスピーカーとして参加することがある。

コルホーズはもう存在しないのに

2009年2月27日に行なわれた日本技術士協会では農業の現場を話す機会を与えられた。農場の空撮した動画などを見ていただき、みんなと手を取り合って夢見るコルホーズ的穀物農作業はもう存在しませんよーと軽くジョブをカマセたつもりでいた。

だって日本は技術立国として確立させるため、とりあえず豊かな社会を目指すのだから、貧乏国から資源を奪ってパナマ国籍の船で運び、フィリピン人を船員として雇い、吉林省などの北出身ではない南の福建

省出身者を研修という嘘で安く雇用することを善しとする。このような社会なのだから、共同、共産、共済などという単語はお嫌いだと勝手に思っていた。

でも現実はずっと複雑系のようなものだ。その勉強会には機械、建築、金属、上下水道など200名ほどの技術士が集まり、農業関係の技術士も20名ほどいたように記憶している。最後に司会者の方が「規模は小さくても農業としての経営は成り立つか？」と質問すると、会場のおおよそ半分の方たちが挙手することになった。

その時点では、まっ、現実を知らない頭でっかち集団なのだから仕方ないな、くらいに思っていた。ところが、司会者が「では農業関係の技術士の方たちはどう考えますか？」と続けたので、私は品がないと知りつつ、ニコニコ顔で「喜んでケンカ買いますよ」とアオツてしまった。

まさか小さな農業に賛同する農業系の技術士なんて存在するわけはないと信じていたが……すべてそう、

Vol.77 小さな農業は可能です



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

農業技術士全員が小さな農業は可能であると挙手したのだ。あんぐりの様とはまさしくこのこと

だ。なかには元普及所員で長沼に勤務したことがあるとか、試験場関係者もいたのだから、驚きの感情で農業技術士全員が哀れな子羊に思えてきた。

ただ、もっと驚いたのは私よりも左翼ではない司会者のほうだった。会場に向かって「みなさん本当

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

ですか?」と聞き直したくらいなのだから。後から司会者と話をしたときに「これが北海道農業の現状なのですね」とため息をつかれた。この司会者とは遺伝子組み換え(GM)作物には100%の信頼を得ていた関係で私にお鉢が回って来たというのには失礼な言い方なので、組み換えが進まない現状打破のための急先鋒としてのお役目を頂戴したのだ。

大規模農業で生き残る

農業とは関係のない学会でも話したことがある。他の分野の人たちの話も聞きましようという趣旨でお誘いを受け、スピーカーとして好き勝手にさせていただくことになった。

昨年4月5日に東京のとある場所で勉強会が始まった。ある農業試験場のスピーカーから農家の法人化の話が出た。法人化というと税金の白色申告から株式会社等の法人格が普通の考えだが、彼が語るのには農家が複数軒集まって集団化することで、名前こそ違いますがまさしく旧ソ連が行なった(行なっている?)コルホーズのことだ。

ただ勤務先の長沼で彼の理想は実現できず、隣町の南幌町で実現することができた。不思議な話だ。左翼が多い長沼の農協や町役場は興味を持たなかったのか? 歴史の教科書

を2行読めばコルホーズはどうだったのか判断できるのに、食いついてきたのが隣町の南幌か……。で、その結果は? 他人様の経営組織には興味がないし、どうぞご自由になってください。

この東京での勉強会はもちろん、「大規模経営、具体的には経営規模の拡大を続けていくことが生き残りの手段として重要であり、その過程においてGM作物の導入は必ず実行しなければならぬだろう。また米国の余剰コーンをエタノールにすることはエネルギー効率を考えると100%正しいとは思われないが、農業政策、輸出政策、つまりコーンが余ればエタノールにして、穀物が足りなければコーンとして利用できる。経済が豊かな国は農業もその予算配分で豊かさを共有できるという米国の賢さを学ぶことは大切だ」などと話した。

すると、参加者から「で、ミヤイさんは米国進出しないのですか?」と質問があった。私は「どの段階になるかわかりませんが、いつも念頭に置いていますよ」と答えたが、もっと具体的に説明しろと言うことになり、またアオツテしまった。

「まず米国での農地の購入は米国民、永住者、投資者でなければ実現不可能ですが、子供たちにはその対

応をしているので、あなたよりも現実性はありますよ」

考えてみれば、マトモな国で外国人が農地を所有、営農できるのはこの日本くらいである。諸外国では宅地の購入は可能でも、農地に関しては先ほどの米国くらいのハードルの高さがあって当然である。たぶん、こんな効率の悪い産業である農業を外国人が参入するとは政府や関係機関も考えていなかったであろう。

また別の機会に、あるセミナーが札幌で行なわれた。海外からの女性の参加者もいたので金髪・ブルーアイ言語を使い、もてなすことになった。札幌にある産業技術総合研究所が開発した技術に海外から参加する方がいることにも驚いた。

なんでも犬の多くは菌周病を潜在的に罹患しているそうだ。そこで、この研究所は治療薬として可能なインターフェロンをイチゴに組み込ませて収穫、粉碎、凍結乾燥後、薬として犬に使用するという。300kgのイチゴから100万匹以上の犬に対応できる量がとれるらしく、コストは今までの1ヶタから2ヶタダウンになるという話で、まさしく遺伝子組み換え万歳!の大偉業である。

そんな話の後に私の番がきた。いつもの農場の動画や空撮を見ていただき、大規模農業は大切ですよと話

したら、次のスピーカーがイチャモンを付けてきた。

彼は「道庁に行くともた納豆用の大豆の話ですかって、ハッハッハ」と馬鹿面下げてみんなの前で笑っていた。つまり私が納豆用の大豆を作っているの、納豆用の大豆生産者など、なんぼのもんだ?と言いたかったのだろうと隣に座っていた大学教授が教えてくれた。

後からトイレに呼んで軽く個別の自衛権でも行使しようと考えたが、彼の経歴を見てやめた。立派な銀行に席を置いて北海道庁の第三セクターに向中の中ようだ。早い話、半澤直樹にはなりきれなかった銀行では使えない物にならないから、一度世間の荒波を感じて来い!でも人事部から言われたのだろうか。

そういうえば北海道のGM条例作成に関与してその後、自分の力で北海道銀行に行った西山奉正さんはどうしているのだろうか。彼は昨年ロシア沿海州に北海道の農業技術を教えてあげよう!と意気込んでいたが、現地の10月の雪に埋もれた大豆のTV画像を見る限り、うまくいっているようには見えなかった。

どちらにしても知ったことではないと考えているのは私だけではないはずだ。そうですよね? 北海道農政部の皆さん?